

K-558

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第64集

丸山日陰館跡

発掘調査報告書

1999

米沢市教育委員会

丸山日陰館跡

発掘調査報告書

平成11年3月

米沢市教育委員会

序 文

本書は民間の土砂採取事業に係わる受託事業として、米沢市教育委員会が実施した丸山日陰館跡の調査報告書です。

丸山日陰館跡は本市の南東部に位置する山上地区にあります。この地区は栗子山を源とする刈安川と吾妻山系を源とする大沢川が合流する場所で、近くに水窪ダムが建設されています。合流した河川は羽黒川と呼ばれています。

館跡は羽黒川によって削平された急斜面な丘陵に位置し、他にこの周辺には鷲城や蛇ノ口館、三沢館があり、戦国時代の要所だったことがわかります。

調査では、他の類例と同様に中世の遺物の出土数は少ないものの、掘立柱建物跡が確認されており、さらに縄文時代の遺物を出土しており、古代の人々の生活の息吹が感じられます。

埋蔵文化財は我々の祖先の足跡が今日まで脈々と伝えられてきた証であり、これらの痕跡を後世に伝えてゆくのも、我々に課せられたひとつの責務と考えております。

最近、各種の開発事業の進展に伴い、発掘調査件数も増加する傾向にあります。これらの事業に、本市教育委員会といたしましても、適切に対処するよう努力しておりますのでより一層のご理解をたまわりますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、今回の調査において、格別のご協力を賜りました太田建設㈱並びに山上公民館、ご指導を賜りました山形県教育庁文化財課に対して、心から感謝申し上げます。

平成11年3月

米沢市教育委員会

教育長 相田 實

例　　言

1. 本報告書は山砂採取事業に伴う緊急発掘調査として、米沢市教育委員会実施した丸山日陰館跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は開発原因者受託事業として米沢市教育委員会が実施したものであり、期間は平成10年4月6日～同年5月8日までの延べ32日間であった。
3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体　米沢市教育委員会
調査総括　小杉 基（文化課長）
調査担当　手塚 孝（文化課文化財係主任）
調査主任　菊地政信（文化課文化財係主任）
調査補助員　黒崎 勉 黒沢富雄 長澤由紀
調査参加者　浅井忠士 遠藤富男 大地良子 金 正純 近野慶子 今野周蔵
佐藤四郎 佐藤高義 鈴木ひろ美 高橋洋三 武田房次郎 西野勇二
新田弘二 松本三郎 渡辺和三
事務局　小林伸一（文化課長補佐）
山本 卯（文化課文化財係係長）
平間洋子（文化課文化財係主査）
調査指導　文化庁 山形県教育庁文化財課
調査協力　山上三沢地区 太田建設（株）

4. 挿図縮尺は、各図にスケールで示した。遺構平面図の方位記号は真北に統一した。
5. 本報告書で使用した遺構、遺物の分類記号及び遺構等の図化は「米沢市埋蔵文化財報告書第15集」に沿っている。
6. 遺構等の土層については、「新版標準土色表」（小山、竹原1973）等を参考にした。
7. 本報告書の作成は菊地政信が担当し、全体的に手塚 孝が統括した。責任校正は山本卯がその責務にあたった。トレース・遺物整理等については、長澤由紀が補助した。

本文目次

序文

例言

本文目次

1. 遺跡の概要	1
2. 調査の経過	2
3. 確認遺構	3
4. トレンチ調査	4
5. 出土遺物	6
6.まとめ	9
参考文献	9
報告書抄録	25

挿図目次

付図 丸山日陰館跡調査遺構全体図

第1図 丸山日陰館跡位置図

第2図 鷺城略測図

第3図 山上三沢館跡略測図

第4図 山上蛇ノ口館跡略測図

第5図 丸山日陰館跡略測図

第6図 丸山日陰館跡腰曲輪A平面図

第7図 丸山日陰館跡B Y 6 平面図（曲輪I）

第8図 丸山日陰館跡B Y 4 平面図（曲輪II）

第9図 丸山日陰館跡B Y 5 平面図（曲輪II）

第10図 丸山日陰館跡B 2・B Y 3 平面図（曲輪II・III）

第11図 丸山日陰館跡B Y 1 平面図（曲輪IV）

第12図 丸山日陰館跡トレンチセクション図

第13図 丸山日陰館跡出土遺物実測図

第14図 繩張図と置賜盆地の城館跡編年表

第15図 東南置賜地区の主要城館跡と街道

図版目次

- | | |
|-------------------------|------------------|
| 卷頭図版 1 丸山日陰館跡全景（西南上空から） | 丸山日陰館跡全景（北方上空から） |
| 卷頭図版 2 丸山日陰館跡全景（西方上空から） | 丸山日陰館跡曲輪群（東南から） |
| 図版 1 館跡全景（上空から） | 図版 5 調査風景 |
| 図版 2 南東の曲輪群 | 図版 6 調査区曲輪群近景 |
| 図版 3 調査区曲輪群 | 図版 7 出土石器 |
| 図版 4 土壌セクション・完掘状況 | 図版 8 出土陶磁器・出土遺物 |

巻頭図版1



▲ 丸山日陰館跡全景（西南上空から）



▲ 丸山日陰館跡全景（北方上空から）

卷頭図版2



▲ 丸山日陰館跡全景（西方上空から）



▲ 丸山日陰館跡曲輪群（東南上空から）

1 遺構の概要

本館跡は米沢市南東部の山上三沢地区に位置する。この地域は古来から福島県に通じる玄関口であり、各時代においてその役目を果して来た。峠に通じる道路は各時期において変容してきたようで、上杉時代としては大沢宿を通り板谷に通じるのが一般的であった。それ以前は現在水窪ダムが建設された沢を通り、明神峠を越えるルートが知られる。

今回調査を実施した館跡の周辺にも有名な城館跡が構築されており、本館跡にも関連を有すると考えられるので、これらの城館跡について概要を述べておく。まず分布を見てみると北方の800m地点には鷲城がある。南部農面道路の建設によって北西部の一部は削平されたが大半の遺構群は残存しており、四季を通じてその雄大な姿は変わることはない。

この山城は別名、土肥館、戸板山館、土肥單館とも呼ばれ、標高502mの早坂山山頂一帯と西に延びる舌状の尾根、さらにはその尾根の左右の谷間にかけて、南北1km・東西0.83kmの範囲に分布している。第2図参照。

遺構は、曲輪群の構成から4のグループに大別される。第1の曲輪群は、山頂を中心とした階段状テラスを主要曲輪とし、南側の緩斜面を尾根に沿って階段状帶曲輪を多数しているのが特徴で、第1山城とした。(早坂山館と呼ばれる)

大手口は第2山城から延びており、西端には樹形虎口、東端には一条の堀切を有し、全長が280m、山頂付近の最大幅で110mを測る。山頂から山麓までの比高差は221mで、急斜面を西側段丘にもつ。

文化元年の米沢地名選によれば、土肥館(土肥備中守)、戸板山館(大津土佐守)、土肥單館(土肥多備中守)、鷲ヶ城(不詳)、内鷲城(子梁川泥幡)とあり、城主の交代を伝えている。曲輪群の形態から想定すると初期形態として、第1山城・早坂山の構築。第1山城と第1居館の組合せ。同じく第2居館との組合せが想定される。

次に第1山城を放棄した段階の形態として、第2山城と第1居館との組合せ、同じく第2居館と組合せが考えられる。最終的には第2山城と第1・2居館の並列がある。もしくは両者の居館を廃棄した形態も想定される。南方約1km地点には三沢館が位置する。地名にもなっている富沢飛驒守の山城と言われ、第3図に示すような形態を特徴とする。

最近(平成元年)に木材運搬道路造成によって、無残にも山肌が削平され、館の約3分の1が消滅した現状にある。示した略測図はそれ以前に作成した。三沢館の構成は、山頂の平坦面を利用して構築し、北側の堀切によって尾根を遮断して独立丘陵を造りだしている。曲輪は山頂の平坦面に3箇所、南斜面に沿って8箇所ある。その一箇所には蔵王権現がまつられている。この南側の登口からは、山崩防止柵工事の際、偶然に「一字一石」経塚が発見された。県が発注した工事であったことから山形県教育委員会文化財課が調査実施している。従って、遺物は現在県が保管している。館と関連するものは報告書に期待するが注目される。

西斜面には、一条の帶曲輪があり、通路として利用したものと考える。館の直下には民家があり、伝承によると我彦藤左エ門の門前に城門があつて、内側に家来達が住み大将は「戸の入」と言う小高い台地に居館を構えていたと聞く。

本館跡は「三沢型」と言われる形態の基準となっており、置賜を中心に分布する。特徴は尾根を堀切で分断して、斜面に多条の敏状構掘を配する。規模は100m前後である。類例としては戸塚山館・川西町の松ノ木館がある。

年代は天正10年前後、伊達輝宗期が盛行と推定される。三沢館の廃城は豊臣秀吉による奥羽仕置(天正19年)が想定される。城主伊達政宗が岩手山へ移転させられた事により、家臣の富沢氏も同行したものと考えられる。

最後に蛇ノ口館を第4図に示した。第1図のD580の南方に位置するもので、標高490mの山頂にあり、比高差は163mを有する。山頂を中心にして東西240m、南北100mの「く」の字状に構築している。館がある頂上からは、遠方の高畠町と川西町が展望でき、東方直下には羽黒が北流している。以上が丸山日陰館跡周辺に分布する山城群であり、北の鷲城と南方の三沢館の中に位置し、関連性が指摘される。

今回調査を実施した館跡は付図に示す形態であり、分布する範囲は東西150m、南北200mの約3万m²の規模をなす。山頂を境として南側曲輪群と北西側曲輪群に分けられ、今回調査を実施した箇所は土砂採集によって削平される北西側を対象としたものである。

南東斜面から北東斜面には帯曲輪が構築され、東方の尾根には堀切が認められる。この掘切を通過して帯曲輪は延び北西部斜面で新しく構築された運搬道路に削平されている状況を呈する。

虎口には現在山ノ神社が建っている箇所及び南方の沢人口付近の二箇所が想定されるが両者も後世の削平によって明確ではなかった。

2 調査の経過

平成8年11月に丸山日陰の山を試掘及び分布調査を実施した。その結果、曲輪群を中心とする遺構が発見された。第5図に示す遺構群である。協議の結果館跡と判明し、その後開発を予定している関係者との打ち合せを重ね平成10年に発掘調査を実施することに至った。今回の調査は、土を取る範囲においては発掘調査、残る箇所については縄張図作成とした。

平成10年4月6日から同年5月8までの期間で調査を実施した。最初に縄張図作成のためのトラバースの設定や発掘調査区の木の枝等のかたづけの両者を平行して行った。しかしながら、枝かたづけが思ったより時間を要することから、重機を依頼した。その結果、4月6日から4月11日の期間でこの作業を終了することができた。

その後、全体の測量を一時中断して、発掘調査を中心に4月13日から開始した。表土は約5cm位で浅いが写真でもわかるように木根が多数あり、困難をきわめた。この作業は5日間を要した。面整理後、精査と進め4月20日から遺構確認に入った。この段階での遺物は数点であった。遺構はピット群を中心とするものであり、掘立柱建物跡を特定する柱穴は当初確認されなかつた。土壤も数基確認されたが、内部からの遺物はほとんど認められなかつた。

4月30日までに、ピット群の半裁や発掘調査区の遺構全体図を作成終了した。5月1日から5月5日までは連休とした。5月6日から、中断していた全体の測量を再開し、同日に終了する。5月7日には空中写真撮影を実施し、5月8日に現場休憩所を解体し終了した。

3 確認遺構

第5図が丸山館跡の遺構全体図である。遺構は斜面を削平し平坦部を整形したもので広い平坦面を有するものを曲輪、階段状を腰曲輪、幅が狭い形態を帶曲輪と呼ぶことにする。これらの用語は山城に対して使用したものであり、本城にあてはめると的確でない場合もあるが、随時説明を加えたい。なお、各遺跡群の呼び名について第3図を参照願う。

丸山日陰館跡の遺構群は南曲輪群と調査区曲輪群とした北曲輪群の2地域に構築されている形態であり、帶曲輪によって両者が結ばれている。南曲輪群は谷間を中心に階段状に配置された帶曲輪、腰曲輪から構成される。帶曲輪は2箇所認められ、南西端まで延びる一条の帶曲輪がある。幅は2m～3mを測り、標高310m付近に構築されている。一部には炭焼窯がありこの帶曲輪を削平してから構築しており、この状況から判断し、少なくともこの遺構が炭焼窯より、以前に構築されたことがわかる。山をとり巻くように配置されたものではなく、中途で止まる事から、接続を前提に配されたものとみられる。

南曲輪群からは、東方の尾根をめざして帶曲輪が延びる。尾根を連続した掘切がある場所を第5図に示した。掘切を通過すると西方は下りとなり、帶曲輪はさらに延び、現在の運搬道路によって削平され、不明と言わざるを得ない。さらに東曲輪群からは西曲輪群に向かって延びる帶曲輪がある。両者を結ぶ最短の箇所に配されたものである。

調査対象となった北曲輪群について説明する。第5図に示したのが測量図であり、発掘調査によって確認したピット群や土壤層も図示した。掘立柱については、「P」で示した柱穴群の配置が明確な場合は実線で、可能性が薄いものに対しては破線で示した。

腰曲輪・曲輪・帶曲輪・虎口から構成される館跡群であり、標高300m～310mの比高差を示す地域に谷間を削平して構築している。下方から腰曲輪A・B、二段目を腰曲輪CとD、三段目に曲輪II・III、四段目に帶曲輪A、上部にB、最上地を曲輪IVと命名した。次に各曲輪群について説明したい。

4 検出遺構

今回の調査区からピット群（P）を中心に総数130基が検出された。遺構別に述べるとピット106基、土壤（DY）6基、掘立柱建物跡（BY）6棟、溝状遺構（KY）3基そして柱穴（TY）の9基がある。最も遺構が集中するのは曲輪IIの標高130m前後の地域である。各地域について述べる。

曲輪IからはKY-1基・TY-3基・P-14基・BY-1棟の計18基、曲輪IIからはTY-3基・P-55基・BY-3棟・DY-1基の計62基、曲輪IVからはKY-1基・TY-1基そしてP-16基・BY-1棟・DY-1基の計19基、曲輪IVからはKY-1基・P-10基・BY-1基・DY-1基の計13基、腰曲輪AからはTY-2基・P-1基の計4基、腰曲輪Bからは検出されなかった。腰曲輪CからはTY-1基・P-7基・DY-1基の計9基、腰曲輪DからはP-3基だけである。帶曲輪AからはDY-2基となる。

次に命名した地区ごとに分布する遺構群について、虎口のある腰曲輪Aから上部に向かって

説明を加えたい。

腰曲輪Aは西から東へ延びる道路を有し、虎口を北部斜面にもつ。広さは東西3~5mで東方から西方に対して広がりを見せ、南北は長軸で4.5m、道路幅は2mである。すなわち台形状を呈する平面形態である。北側は急斜面で中腹にテラスが有り、現在ほこらが祀られている。遺構としてはDY1・P22・TY4・TY5がある。

第6図に示したのが平面図でありDY1は円形状を有する。長径155cmを測る円形状をなし深さは30cmである。底面は平坦で壁面はゆるやかに立上がる。底面中央からは第14図に示した11の毛抜きが出土している。覆土は平坦自然堆積を有し、三枚認められた。東西に列をなして、3基あるP22・TY4・5の関連性は認められなかったが、虎口の直下でもあることから目隠し的な板塀施設とも考えられる。

腰曲輪は不整形をなす平坦部を有し、東方から北方に傾斜している。この平坦面についても精査したが、遺構は認められなかった。

虎口を登ったところに位置するのが、曲輪Iとした平坦地である。幅は3m~4m長さは12mを測る。BY6は3間×2間を有する掘立建物跡があったことが推測されるが、構成するピット群が足りなく明確でないので破線で示した。規模としては、東西4.1m(12尺)・南北5.7m(17尺)と想定したい。BY6を構成する遺構として、P4・5・10・11・12・TY3がある。中央部には溝状遺構のKY3が南北に長さ1.8m、幅は平均50cmを測る。深さは浅く、最深でも10cm未満であった。第7図参照

その北方上部にある腰曲輪Cは長径4.2m・短径3.8mの方形に平坦地を整形している。P15・17・18・19・20・23・24・TY6が確認されたが関連性は認められなかった。

北方斜面直下には炭化物を多量に含むDY3が確認されている。平面形状が橢円形で、ボルト状に掘り込んだ形態をなす。状況から判断してたき火をした痕跡と考えられる。遺物は出土していない。この地に通じる通路としては曲輪Iの北東部斜面がある。

曲輪IIと平坦地は幅(東西)15m・南北幅3.5m・最大幅は東方で4.7mを測る本館跡最大規模を有する。第9・10図に示したBY2・3・5の3棟を有する曲輪と考えられる。構成するピット群に重複関係は認められず短期間の建物跡と考える。東西に長径を有するBY5・4が少し離れて方形状のBY3がある。しかしながら3棟とも明確に柱穴は認められなかったことを記しておく。しかしながら、確認した柱穴群の中には柱痕跡を有するセクションも認められることから、あえて推測すると上記した掘立柱建物が存在と推測されるのである。各掘立柱建物跡を述べると下記のようになる。

BY3は東西3.3m・南北3.1mの方形を有する。尺度と言えば10尺×10尺と推定される規模である。掘立柱建物跡を構成する柱穴群はP45・46・54・58が認められる。ただしP45・46の間隔が狭く、P46は除外したい。破線で示す箇所が推定線であるが線上にはプランは確認されなかった。柱穴の深さはいずれも浅く、12~18cmであった。仮りに1間×1間の建物で考えられるなは物見台と推定されるが、この施設ならもっと頂上近くに設置すべきものであり、上部施設は不明と言わざるを得ない。

B Y 3 から東方へ3.5m離れて、B Y 4 が構築されている。南北8.4m(25尺)×東西は4.2m(12尺)を有する掘立柱建物跡と考えられる。この建物跡を構成する柱穴群はP 77・76・67・66・59・78・79・T Y 9 が認められる。確認されなかった南方部を中心に精査を重ねたが発見することができなかった。

2間×3間の柱穴群が想定され、東西の1間は7尺(210cm)、南北の1間9尺(270cm)を有すると考えたい。北側のP 77・78・79の柱穴上面には長径20cm位の河原石が突き刺さった状態で出土した。この3基の柱穴は東西に配置され、深さは40cmある。柱穴の長径はP 77が60cm P 78が52cm・P 79が68cmであり、円形を呈する。第8図参照

さらに、B Y 4 から北東に2.2m離れてB Y 5 がある。東西3.4m(10尺)、南北5.2m(15尺)を有する掘立柱建物跡と推定される。柱穴群はP 81・85・91・T Y 10が間尺の線上に認められる。

第9図を参照願いたい。柱穴は平均50cmを有す円形をなし、深さは10cmと浅い。

南北が3間×東西2間の間尺が想定され、間尺は南北が7尺東西・5尺の建物跡と考える。

この曲輪IIには他にP 84・82・95・92・106・94・93・63・61・60・64・65・53・52・51・50・49・44・48・46・47・90・86・89・83・80・87・88・T Y 8・P 55・57・56・82・78・74・76・73・72・70・67・69・68・62・D Y 4 がある。

これらについての関連性は見出だすことができなかつたが、柱穴群と考えられ、曲輪に関しても数回の建て替えが想定される。D Y 4 は東方端に位置する。当初土壌と考えて掘り下げたが、覆土から判断して、木が腐ってできた自然坑であると判明した。大木があったことが伺える。覆土は黒色を有する粘質土で、凹地だった所に大木があり、その後上部からの土砂の流入により埋まったものであろう。遺物は出土していない。

帶曲輪Aは幅が最大7mを測る平坦地を整形し、東方に延びる。東方部は幅がせまくなり自然と山の斜面になる。北から南へやや急に傾斜するもので、斜面を削平しただけで、平坦地を積極的に整形したとは思われない。帶曲輪AからはD Y 5・6が確認されている。大形形状をなし、2基とも楕円形状を有する。D Y 6 に関しては木の根が固くい込んでおり、半分しか完掘できなかつた。

内部からは多量の木炭が出土している。D Y 5 は浅く、木炭は含まない。D Y 6 は山仕事との際に小屋をかけ、暖を取るために穴を掘って火を燃やした場所とも考えられるが、根拠はないので不明としておく。

最とも高い所に位置す曲輪IVは標高309mを有する。南北8m、東西12mに整地された場所であり、南東に通じる帶曲輪が付随する。B Y 1 とした建物があつたと思われる。この建物は東西5.4m(16尺)・南北4.5m(13尺)を有すると想定される。東西3間×南北2間と推測したい。東側にはクランク状の溝状造構K Y 1 がある。幅は70cmあるが深さは10cm位と浅い。覆土は一層で少量の炭化物を含む。途中プラン消滅した箇所も認められる。

B Y 1 に関する柱穴としてはP 98・100・105・99・104の5基があるが他は不明であり、すべて破線で示したがK Y 1 の存在から考慮すれば建物の存在は色こくなる。溝状造構は建物の排水路と考えるからである。

他にDY2がある。1.4mを測る円形状をなし、深さは50cmある。底面は傾斜する形態であり、東側の壁は直角に、西側はゆるやかに立上がる形状である。他にP97・102・103・101・96がある。これで調査区の曲輪群から検出した遺構群の概要である。

5 トレンチ調査

曲輪群の調査終了後縄文時代の遺構確認のため、A～Eの箇所に対してトレンチ調査を実施した。これは縄文時代の遺物が出土していることによる。また、斜面の形態を知る上でも重要と考え、それぞれの代表的な場所を選定して実施した。その結果について述べる。トレンチを配置した場所は第6図に示したので参考願いたい。また、斜面の状況については第13図に示したのでこれも参考願いたい。

Aトレンチは腰曲輪Aの東方に配する。この箇所は虎口の通じる帶曲輪で上部にはBY6有する曲輪Iである。このトレンチの周辺で第13図示した所の打製石斧を採集している。のことと共に、縄文遺物が出土する箇所との期待もあって、この地を選定した。

スクリントンで示すのが地山の箇所であり、Aトレンチは最も盛土が多く認められた。盛土は固くたたいた版築層の要素は認められず、曲輪Iを整形するために、削平した土砂を盛り上げ、平坦地を造り出した様相を呈する。セクション図でもわかるように、ゆるやかな斜面であったことがわかる。

第1層は黄褐色で少量の黒色土を含む。第2層は黄褐色に黒色土が混合する。第3層は黒褐色が主体をなす。この層位からも上部から下方に削平した土を順次盛土したことが伺える。Bトレンチは虎口付近に配置した。盛土は最大30cm位であり、一層で占められる。この箇所は虎口を整形するため土砂を必要とし、むしろ削平して斜面を造りだし、この土を利用し傾斜を造り出し虎口としたものである。この盛土からも遺物は出土しなかった。

Cトレンチはほとんど構築状況と変化していないものである。図でも理解できるように自然堆積が10cm、下場にくるとやや厚く25cmを測る。この斜面に沿って、第13図6の面取石が出土している。この遺物の他に河原石が3個出土しているが、使用した痕跡が認められないことから作成しなかった。ちなみに館跡のある山は礫岩が風化した基盤層であり、類面岩や安山岩の岩石はないので、他から持ち込んだ河原石であることはまちがいない。

Dトレンチは腰曲輪Dとした北方部斜面であり、自然堆積による一層で占められる。削平して整形した斜面に長年に渡って流出したと考える土砂であり、地山との差異を用意に判断できた。この斜面からは第13図に示したこの石匙が上面から出土している。縄文時代の遺物であり館跡との関係はない遺物である。

Eトレンチは曲輪IIとした箇所に配した。山の谷間の中央部にあたることから堆積土も多い。この箇所の下場が不整形を有するのはこの堆積状況が影響したと考えたい。出土遺物は認められなかった。

これら5箇所の他に図示しなかったが、南側曲輪群にも試掘トレンチを配した。遺物・遺構は確認されなかった。なおこの箇所は埋め戻して、現況に戻した。

どのトレンチからも縄文時代の遺構は確認されなかった。これは、館跡の曲輪群と重複した場所と考えられ、削平されてしまったものと推定される。

6 出土遺物 [第13図 図版8]

総数27点と広範囲な調査区の割合には極端に少ない。この現象は他の館跡調査でも同様であり、この点では今回の調査区にも類似する。遺物を分類して述べると縄文土器片2点、石器4点、礫器1点、陶器13点、砥石2点、毛抜き1点、キセル1点、不明鉄製品1点、古銭1点、石製品1点であった。

これらの遺物の出土状況は遺構に伴うものは少なく、大半は盛土や表土といった表採品で占められる状況であった。特に石器類は削平し整形した曲輪群の斜面に認められ、削平した際に偶然出土した状況を呈する。土器片も運搬道路となっている箇所であり、調査区からの出土は認められない。陶器類に関しては少破片が多く、図示するまで至らなかったので、写真で示した。以下、各遺物について列挙した順に述べる。

縄文土器片 [第13図 8]

磨滅が著しい1点をのぞき唯一図示したのが8である。赤褐色をなし、縄文を施している土器片で胎土の吟味から縄文後期初頭の土器片である。館跡が位置する三沢地区羽黒川右岸にはこの時期の遺跡も発見されている。館跡北東に位置する小峠沢地区周辺に集落があったと推定している。

根小屋は、現在の集落と重複していると考えられる。

出土石器 [第13図 1~4]

1は石鎌で、尖頭部と脚部が欠損している。2は石匙であり、縁辺に使用痕を有する。形態から縄文時代前期の年代と考えられる。3は長方形に整形した両面調整の打製石斧であり柄着裝痕、刃部には使用痕を有する。石器の形態は縄文早期中葉から出現する石器であるが出土した石匙と比較すれば縄文前期に位置づけたい。4は削器で縁辺に使用痕を有する。

出土した石器3点に使用痕が認められ、縄文時代の前期、後期に本館跡が生活の場となっていたことはまちがいない。館跡を調査して、石器が出土した例としては本市の南方に位置する縁返館がある。本館跡からは住居跡も発見され、元来館跡となる場所は古代から利用されてきた場所であることが分かる。

これは、見晴しが良いことや、近くに川が流れている。日あたりが良いなど恵まれた自然環境も要因であるが、もう一つは祖先が集まる場所でもあった。すなわち天に近いところといった意味を有するものと考える。

館の構築された場所は、この他にも古墳がある場所・中世墳墓のある場所・経塚のある場所といった精神文化を示す構造物が多い。

礫石器 [第13図 6]

石英粗面岩を素材とした磨石であり、長方形を有する形態で断面形態は三角形状をなし、最も幅の狭い箇所を使用面としている。縄文時代を通して広く見られる形態の礫石器であり、

本館跡から出土の礫石器は縄文時代と位置づけたい。

陶器類 [図版14~24]

11点について写真で示した。19は急須の蓋で近・現代の遺物であり割愛した。17・24は奥須の染付文様を有する茶碗である。16・23は緑釉をかけた小皿の破片である。14は天目を模した茶碗である。外面の半分だけに釉がかけてある。20・21は口唇部に鉄軸をかけた小形の鉢があり同形片と考える。15は段を有する器形の小皿で茶褐色の釉を全面にかけている。

22は方形の小皿で内面には方角文がある。白色のうわぐすりであるが、光線のかげんんで緑色にも変色する。これらの陶器類で14の破片は大掘相馬焼と推定されるがこの窯の開始年代は1624年頃で17世紀以前の遺物ではない。22は切込焼の皿と考えられる。宮城県加美郡宮崎町切込にあり、1830年の開業である。従ってこれらの陶器類は17世紀以前のものではないと考えられる。当市では成島焼で知られる窯で安永9年(1780年)の操業である。

砥石 [第13図7 図版8の7]

第13図7の砥石は凝灰岩を整形したもので、高畠産である。この種類が出回るのは江戸中期以降との説があり、その後現代まで使用されている。従ってこの遺物に対して年代を決定するのは困難である。図版8の7は山石の泥岩をそのまま使用した形態であり、中世にも認められる形態である。

毛抜き [第13図11]

腰曲輪AにあるDY1底面から出土している。長さは7.5cm、幅0.5cm、厚さは0.2cmを測る。素材は銅を使用していることが緑色を有する腐食からわかる。現在はステンレスや合金を使用しており、現代の遺物ではないと考える。なぜDY1の底から出土したのかは不明と言わざるを得ないが、人間が一時生活した場所を示す遺物と言える。

キセル [第13図9・10]

9は5.8cm・10は6.2cmを測る。両者を竹で接合する形態であり、この箇所は腐食して残存していない。頭部が大きく、吸い口が細い形状である。一般に言われる古い方の種類に属すると考えられる。腰曲輪Dの斜面付近のは表土から出土している。素材は銅を使用している。

不明鉄製品

サビ具合から推測すると、中世の時期に位置すると考えられる。サビた固まりの中に方形の断面が観察され、一見すると鉄鏃を想定するが、尖端部がなく断定は出来なかった。

古銭 [図版8・26]

寛永通寶と認める。直径2.4cmウラに波をもたない形態で、方形の穴を有する。曲輪Iの表土から出土しているものである。

石製品 [第13図5]

帶曲輪Bの斜面から出土している。白色の砂岩を研磨によって円形に整形した石製品で長径は4.2cm・厚さは1.1cmを測る。両面とも平坦に仕上げている。縄文後期に特に多く出土する置物であるが、中世の館跡からの出土例もあり、時代は断定できない。

中央に穴をあけて、軸となる棒を通してコマのようにし、糸をつむぐ紡垂車の未完製品とも

考えられる。紡垂車は土製品・石製品の両者があり、山中から出土する例もある。

7 まとめ

館の年代と特徴を述べまとめとしたい。

今回の丸山日陰館跡からは、残念ながら年代を把握する遺物は検出されなかった。しかしながら、置賜地方の山城の形態には、曲輪群を構成する特徴が年代によって変遷をたどっていることが指摘されている。

第14図に示したのは、その代表である。置賜地方を見ると12世紀代に平城として登場した館は関東武士団の登場とともに城の形態にも変化を呈し、14世紀前半には小規模な山城が形成されるようになる。

15世紀に入り、陥しく高い山頂を選定して帶曲輪を多様した山城や畝状横掘を特徴とする山城が主流となり、16世紀になると山城の全盛期を迎える。主郭を城の中心に置き、単郭式から急速に複郭式の形態が発展し、根小屋と呼ばれる居館が別に付随するようになる。特に主郭の防御に重点を置き、大規模な掘切や土塁の巨大化に表れる。

丸山日陰館の曲輪群は、第IX段階の居館形態の三沢型や中野森型に類似している。しかし、主体を示す主郭の存在ではなく異質な形態と言わざるを得ない。戦国時代の城の存在は、統治支配者の中心となる館山城等の主城を中心に出城、支城、有事の際に築かれる臨時の城、詰城などが街道周辺に築かれていたものと考えられる。第15図参照

これらは、大きく恒久的な城と臨時的な城に大別される。この点を考慮すれば、丸山日陰館跡は後者の臨時的な城に分類したい。建物の規模や柱の切合(立替)もみいだせないことから、隣接する三沢館や鷺城に関連した施設として臨時に構築された可能性が高い。

従って、年代も16世紀中頃と推測するのが妥当といえる。米沢を中心とする置賜地域には、伊達氏に係わりをもつ城館跡が約700箇所近く所在する。大半の城は未調査であり、内部構造が明らかになったものはほとんどなく、今回の丸山日陰館跡の成果は城館跡研究にとっての貴重な資料を提供したと言える。

最後に今回の調査にあたり御協力いただいた地元の皆さん、関係者各位に厚くお礼申し上げます。

参考文献

1995 山形県教育委員会 山形県中世城跡調査報告書 第1集 (置賜地域)

中世城跡調査員

東南置賜地区

米沢市 手塚 孝 菊地政信 月山隆弘 橋爪 健 佐藤弘則

南陽市 加藤次郎右エ門 丹野虎次郎 鈴木 朗

高畠町 山崎 正 青木敏雄

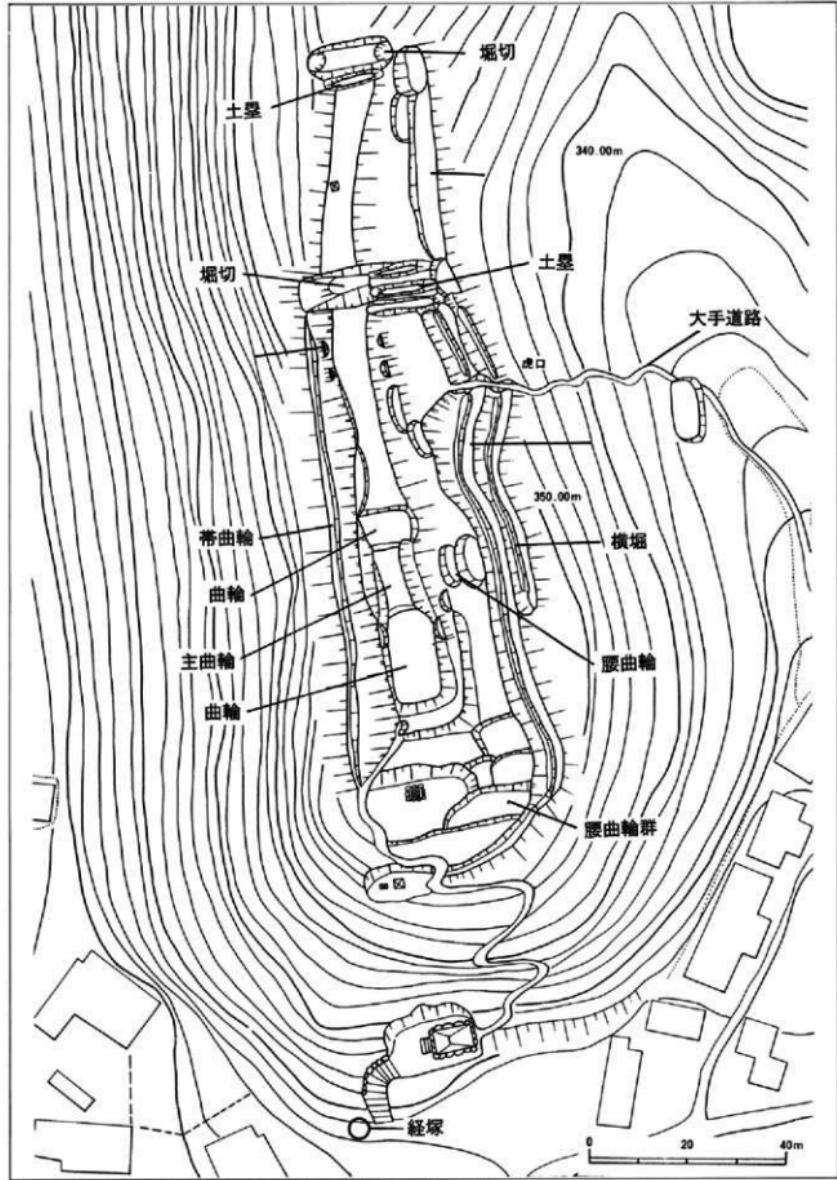
川西町 藤倉徳夫 緒形成美(旧姓伊藤) 高橋啓一 藤田宥宣 西山龍法



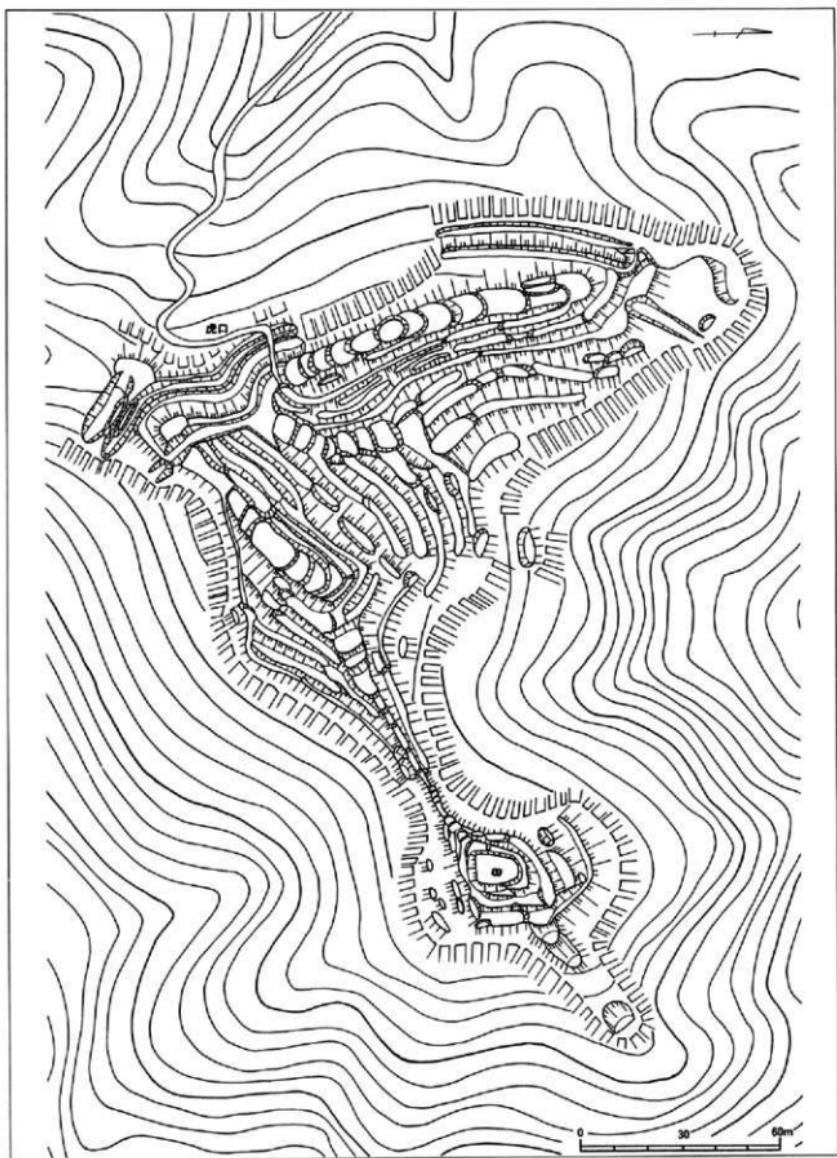
第1図 丸山日陰館跡位置図



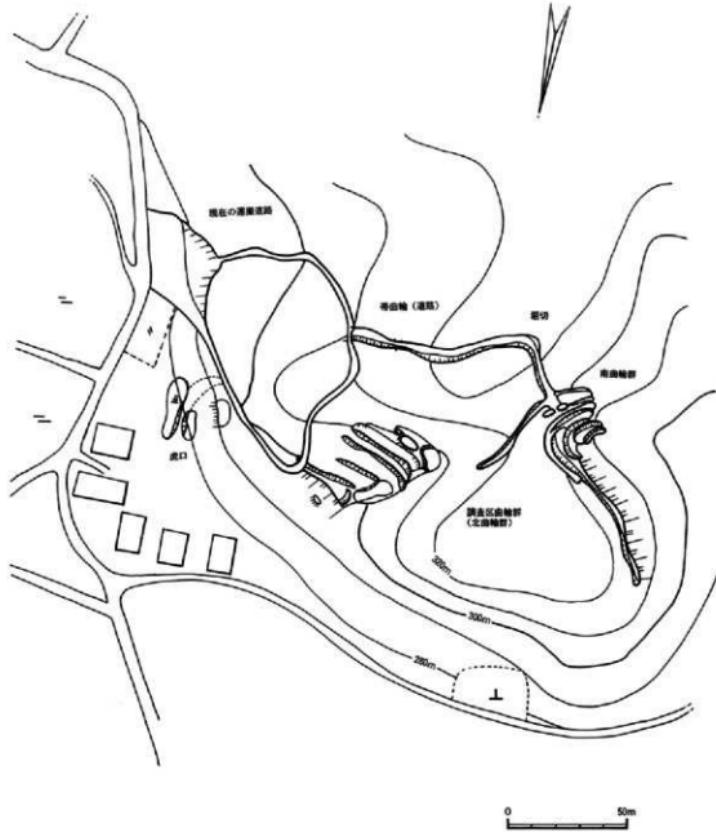
第2図 鷹城略測図



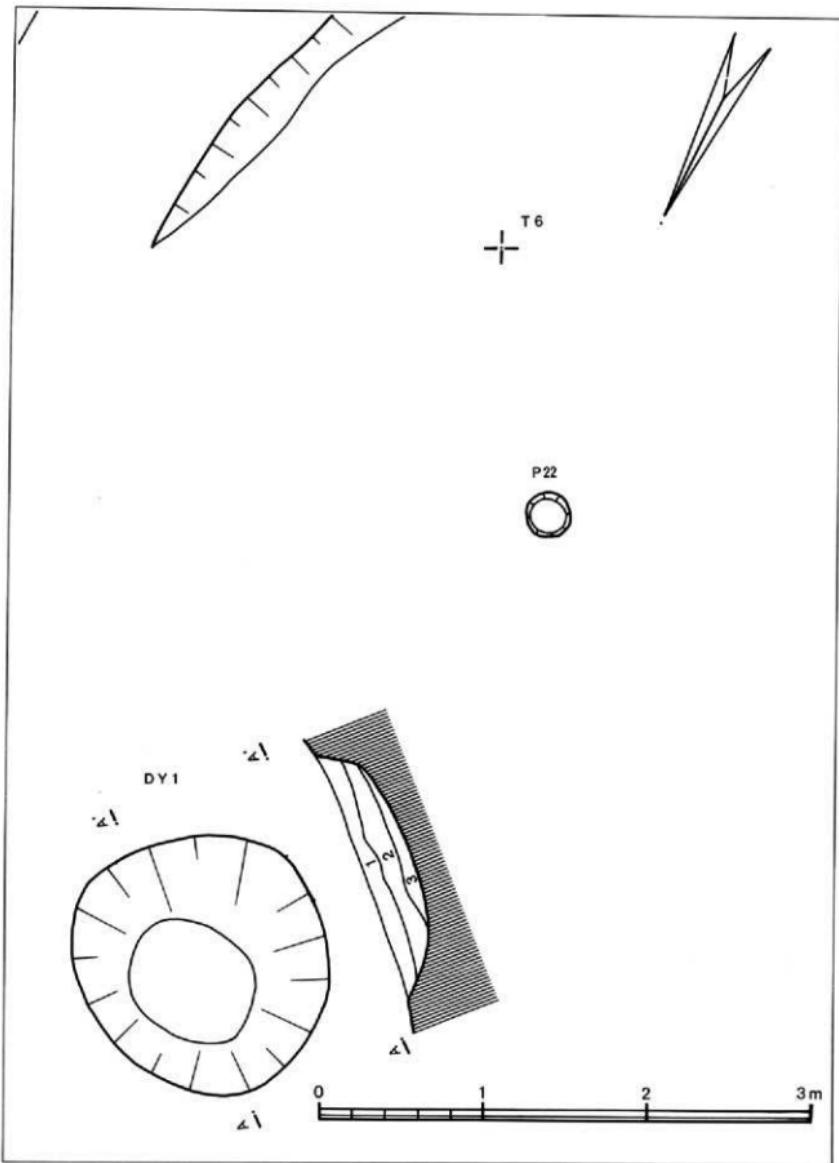
第3図 山上三沢館略測図



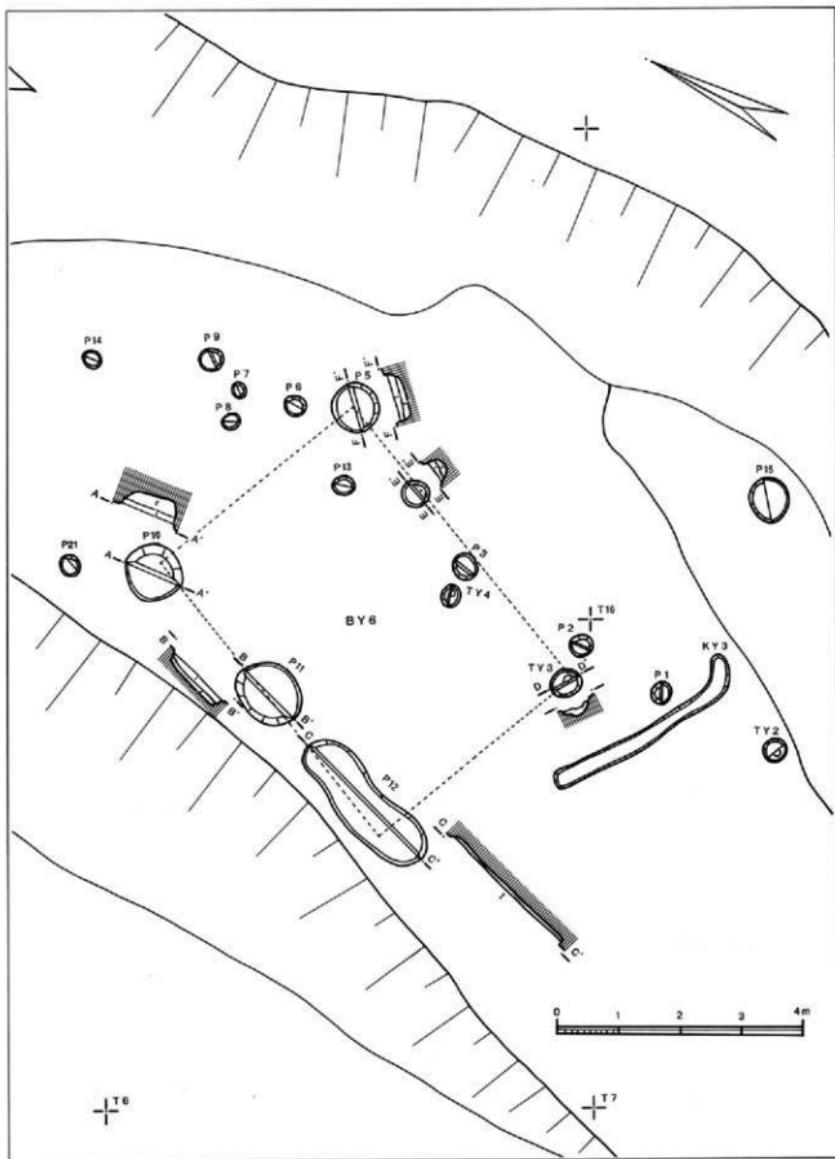
第4図 山上蛇ノ口館



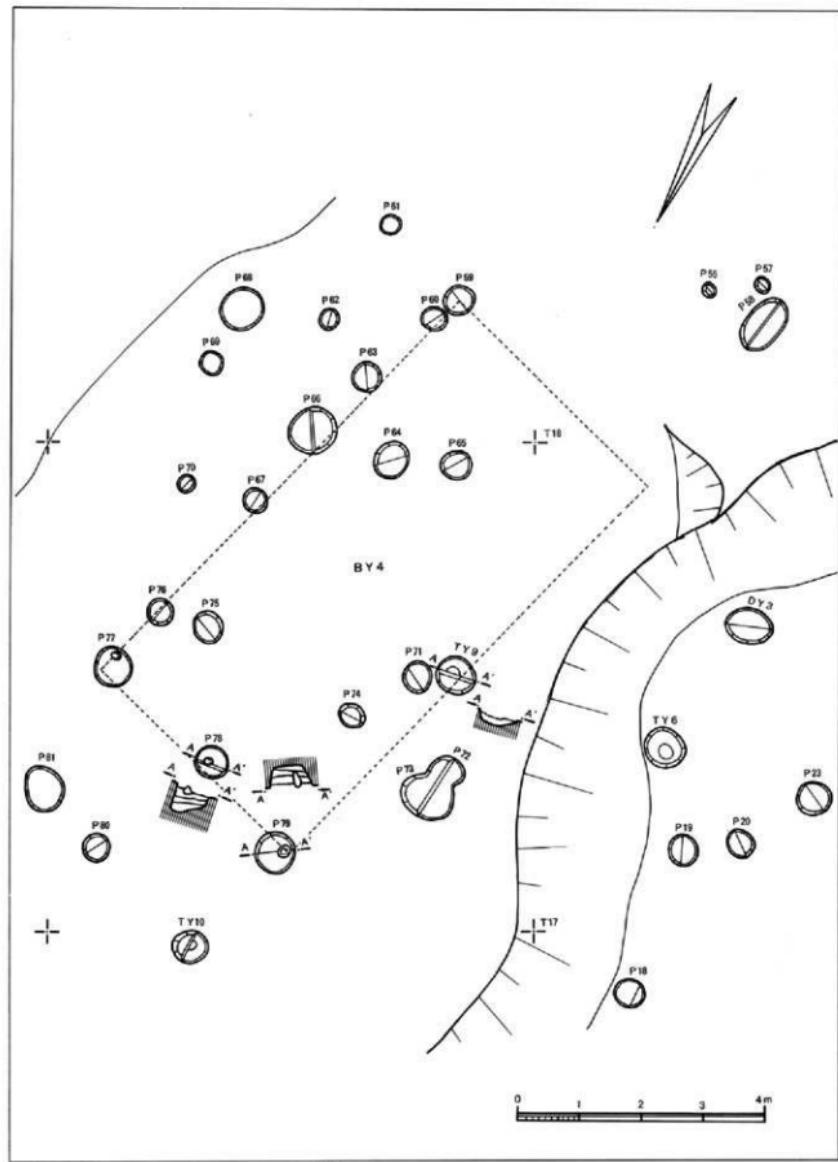
第5図 丸山日陰館跡跡測図



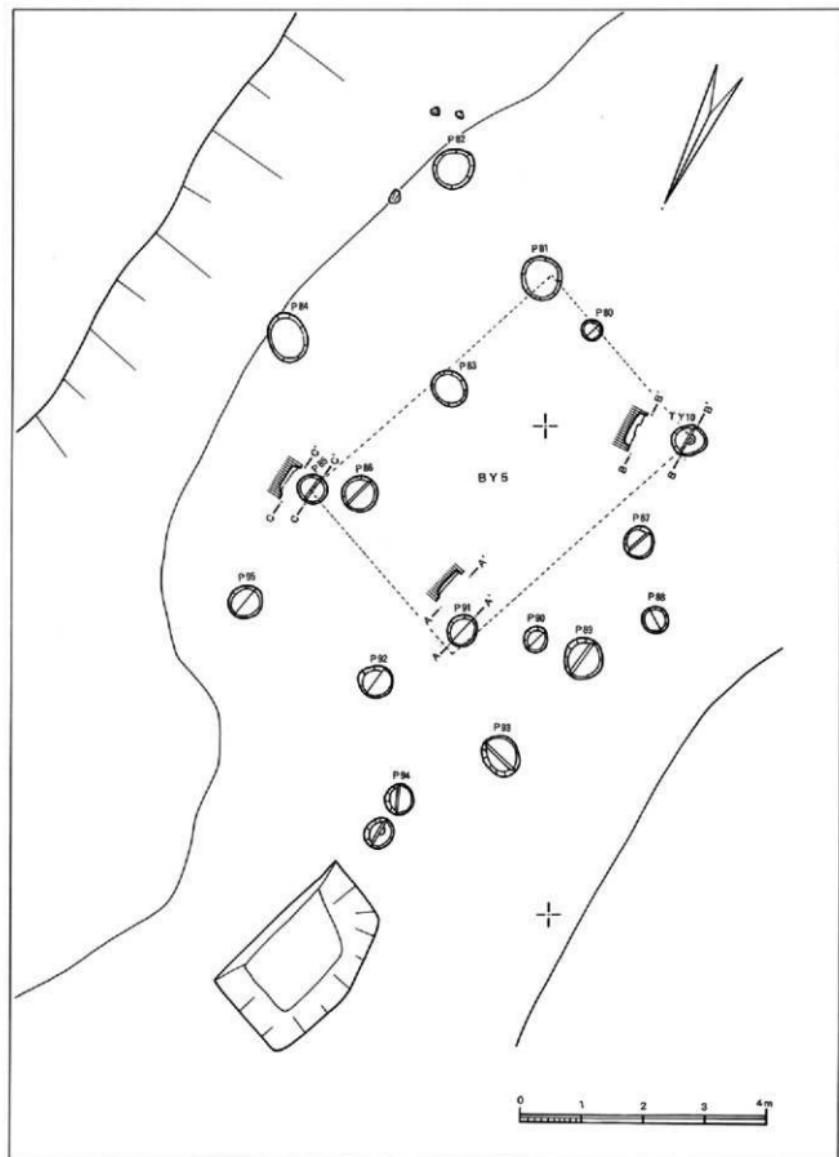
第6図 丸山日陰館跡腰曲輪A平面図



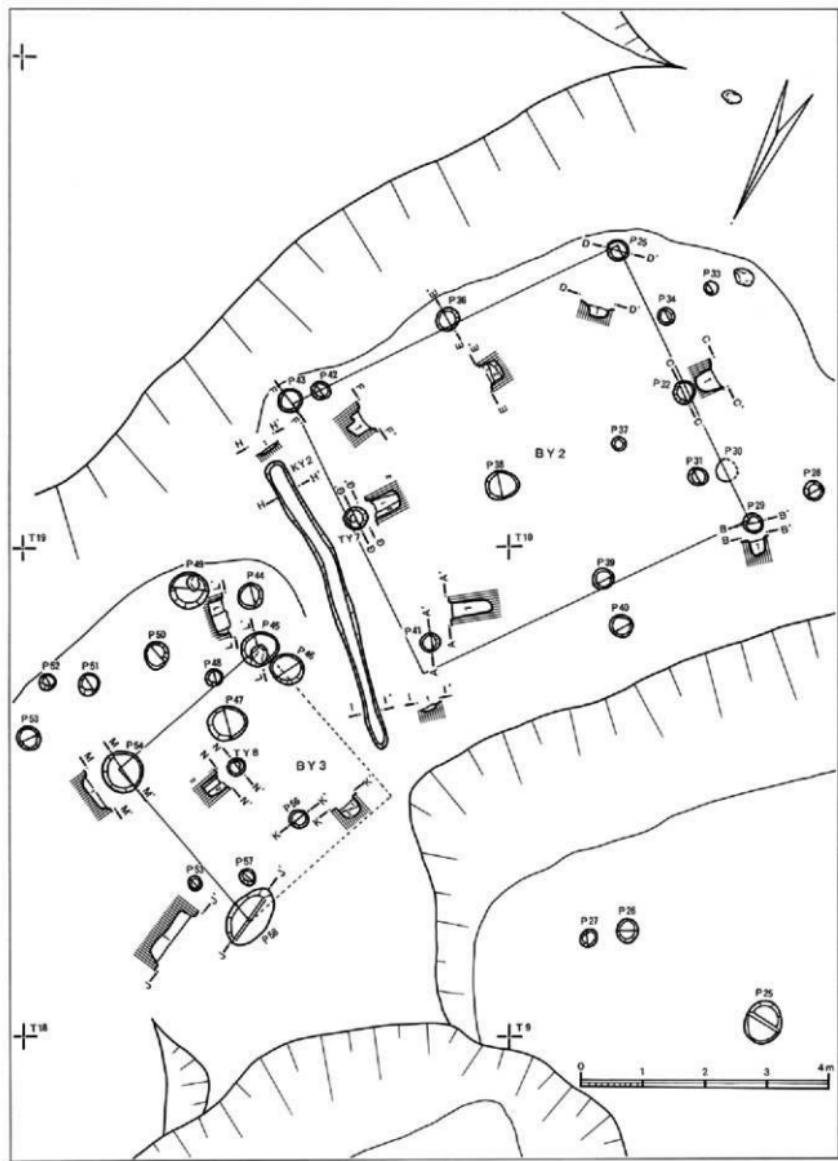
第7図 丸山日陰館跡BY 6平面図（曲輪I）



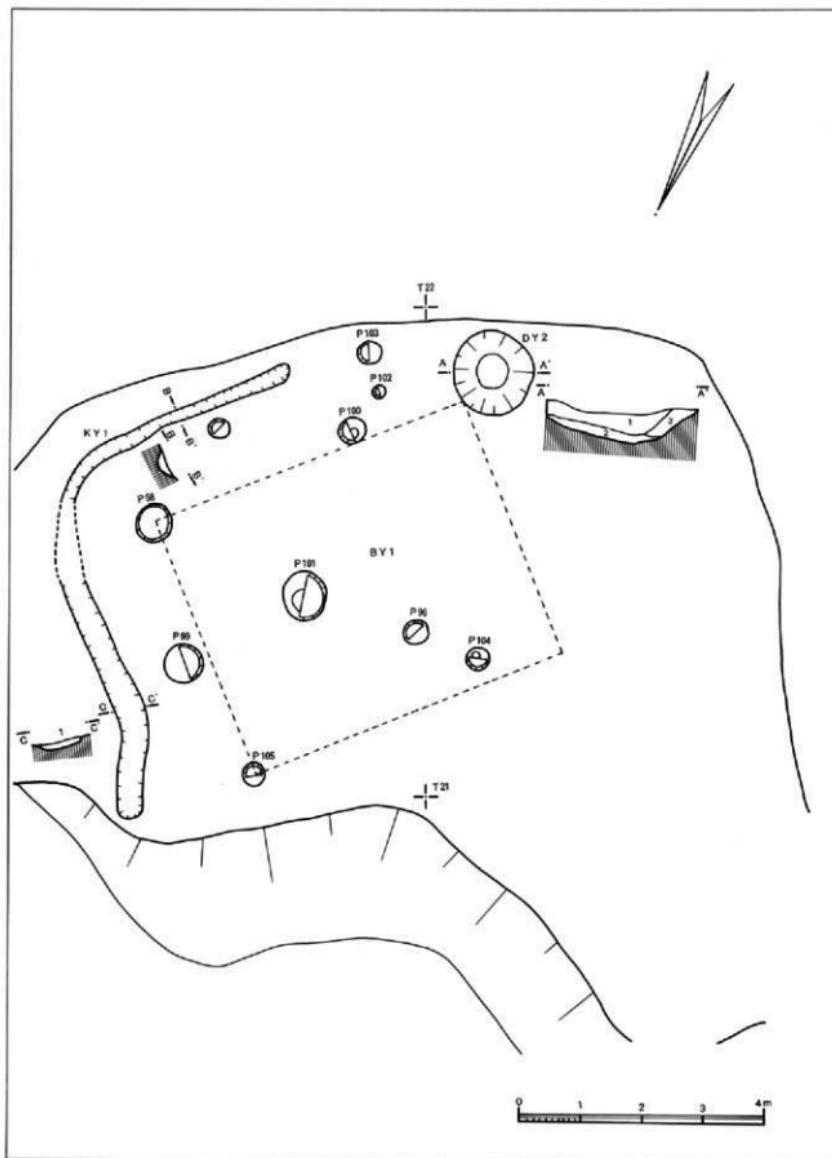
第8図 丸山日陰館跡B Y 4 平面図（曲輪II）



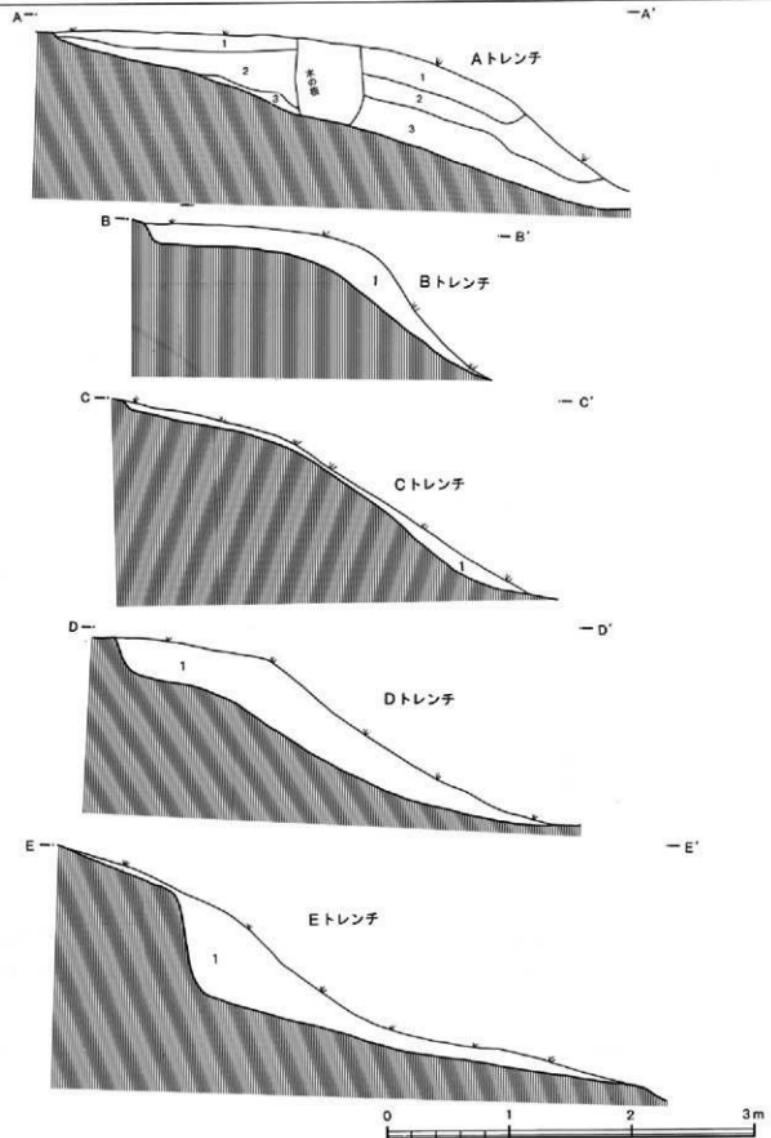
第9図 丸山日陰館跡B Y 5平面図（曲輪Ⅱ）



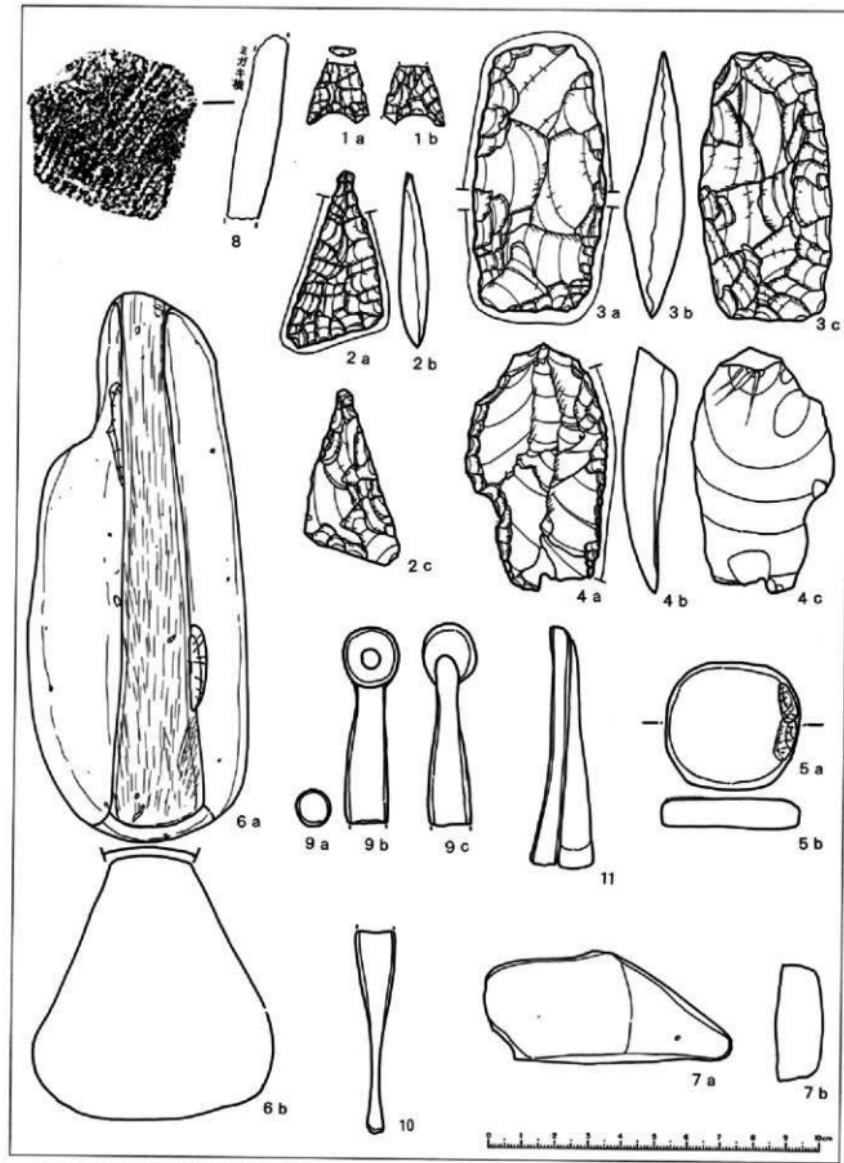
第10図 丸山日陰館跡B Y 2・B Y 3 平面図(曲輪II・III)



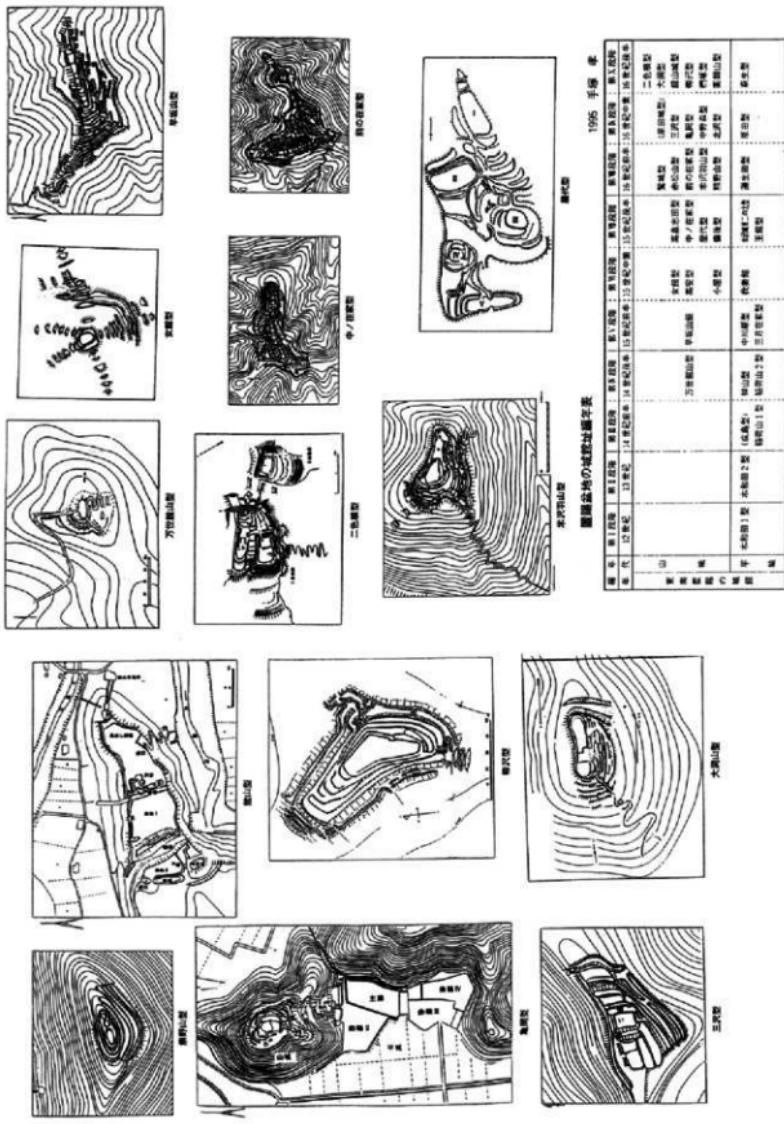
第11図 丸山日陰館跡BY1平面図(曲輪IV)



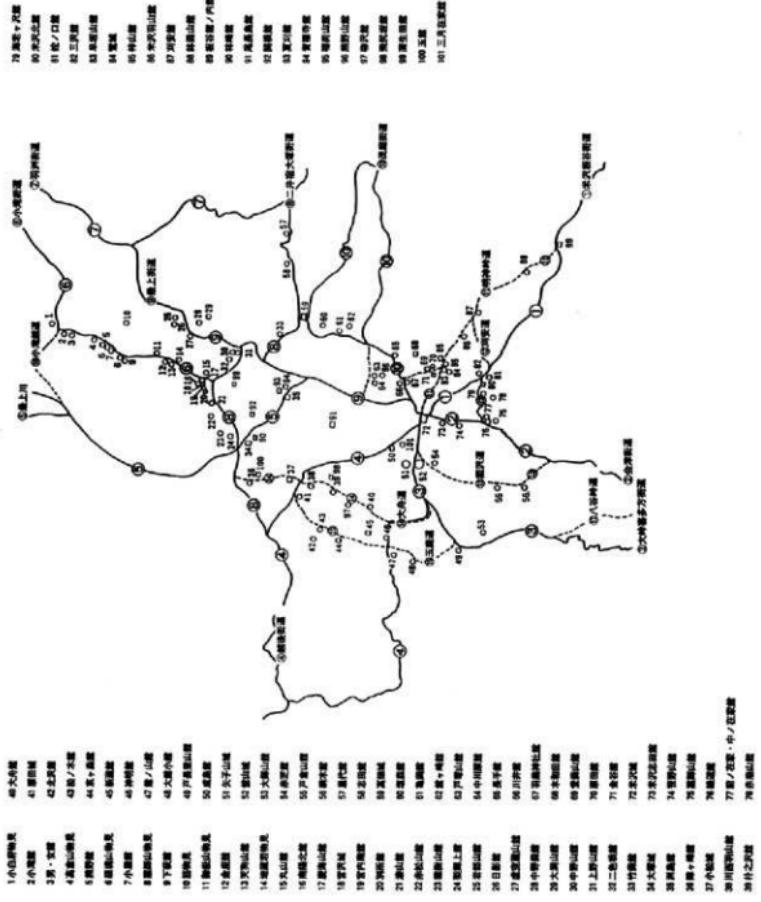
第12図 丸山日陰館跡トレンチセクション図



第13図 丸山日陰館跡出土遺物実測図



第14図 縄張図と置賜盆地の城館跡年表



第15図 東南置賜地区の主要城館跡と街道

報告書抄録

ふりがな	まるやまひかげたてあと						
書名	丸山日陰館跡						
副書名	丸山日陰遺跡発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第64集						
編著者名	菊地政信						
編集機関	米沢市教育委員会						
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池三丁目1-55 ☎0238-22-5111						
発行年月日	西暦1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
まるやまひかげたて 丸山日陰館	やまがたけんよねざわし 山形県米沢市 おおあざみきわあざまる 大字三沢字丸 やまひかげ 山日陰	6202 D-604	37度 53分 1秒	140度 9分 35秒	19980406～ 19980508	3,200	山砂採取事業に 伴う緊急発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
丸山日陰館	城館跡	戦国時代	曲輪群		周辺に大規模な山城もあり本遺跡は支城的な役割が推測される。		

写 真 図 版



▲ 館跡全景（上空から）



▲ 館跡全景（上空から）

図版2



図版3



曲輪IV全景（南方から）



曲輪II全景（北西から）



KY1近景（南方から）



BY4近景（南方から）



KY1近景（南方から）



曲輪群（北西から）

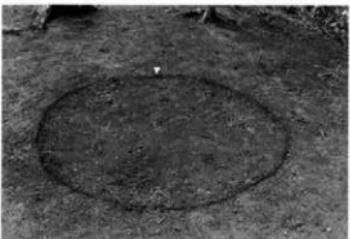


石匙出土状況（北西から）



腰曲輪A近景（南西から）

図版4



DY 1 プラン確認状況（南方から）



DY 2 プラン状況（西方から）



DY 1 セクション状況



DY 2 完掘状況



DY 1 完掘状況遠景



P 7・P 6 プラン確認状況



DY 1 完掘状況近景



TY 1 プラン確認状況

図版5



曲輪II調査風景（南西から）



曲輪II調査風景（南方から）



腰曲輪D調査風景（南西から）



重機を使用しての枝かたずけ風景



曲輪I調査風景（南西から）



曲輪I調査風景（北西から）



虎口付近調査風景（南方から）



曲輪III調査風景（西方から）

図版 6



曲輪群近景（南方から）



曲輪群を上方から望む



曲輪群を南部下方から望む



腰曲輪 A を南方から望む



曲輪群を下部から望む



曲輪群を北西から望む

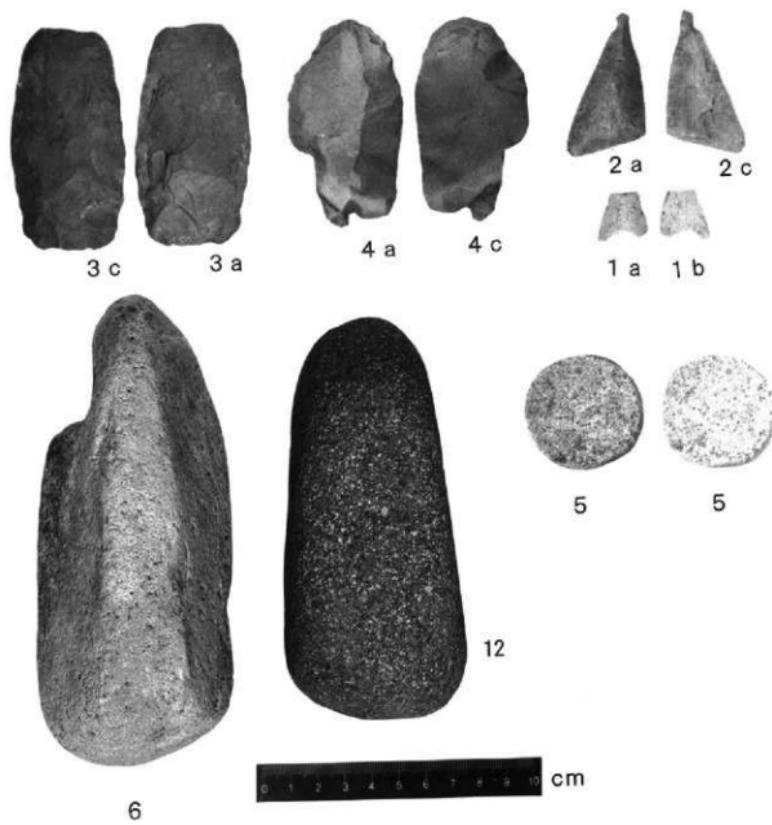


曲輪群遠景（南西から）

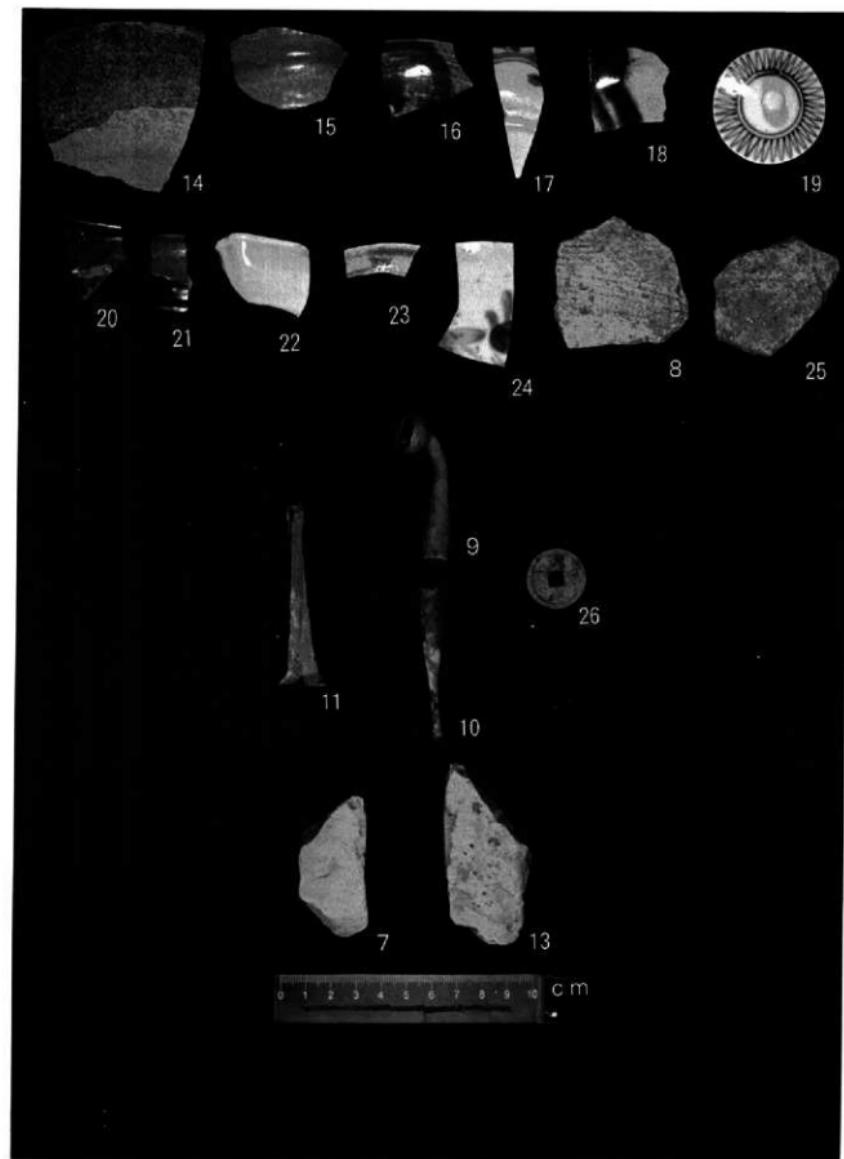


曲輪群遠景（南方から）

図版7



図版8



米沢市埋蔵文化財調査報告書第64集

丸山日陰館跡遺跡

発掘調査報告書

平成11年3月25日印刷

平成11年3月30日発行

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池五丁目2-25
TEL (0238) 22-5111
(内線 7504)

印刷業者カワサキ印刷
米沢市松が岬二丁目3-17
TEL (0238) 22-6146㈹
FAX (0238) 21-5645